

東京市場における鉢物の市場動向調査

荻窓園芸市場における主な鉢花の入荷量と価格の分析

橋 本 貞 夫

Market Trend of Potted Plants in Tokyo :
Research and Analysis of Principal
Potted Plants at Ogikubo Horticultural Market
Sadao HASHIMOTO

I 緒 言

花き市場で取扱っているものの種類別入荷量、金額について時期別に集計した資料はほとんどなく、作物の種類ごとに時期別に入荷量や単価をつかむことは困難な現状である。

花きの中で、特に鉢物については市場取引の歴史が浅くしかも、製品のサイズ、品種等の規格統一に欠けるために市場伝票の整理がしにくく、統計資料が少ないが、当研究室で昭和34年から荻窓園芸市場について調査してきたものが昭和41年まで刊行されている。

荻窓園芸市場は鉢物、苗物、植木の専門市場で、切花類は取扱わない。その面では我国で最初に開設（昭和27年）されたもので、東京における代表的な鉢物市場である。

鉢物、苗物、植木の需要は近年になって急激に増加し、東京都久留米市にある久留米園芸センター等、各地に流通センターが設置されてきており、これからも増設される機運にあるが、本報告は、これら流通機関の代表として存在する荻窓園芸市場の伝票の集計結果を用いて、鉢花の市場動向を分析したものである。

集計資料のうち、昭和39年は一部分の市場伝票の紛失により、また、昭和42年以降は取扱金額が品目により未整理であることなど、充分な検討を加えられない面があるが、ほぼ、その目的を達することができたものと思う。

この種の市場伝票を整理、集計する作業は細かい注意と、極めて多くの労力を必要とするが、仲宇佐達也前経営部長をはじめ研究室員の多年にわたる協力と、農芸普及課、高島技師、工藤専門技術員、および、荻窓園芸市

場、神田秀穂専務理事の協力と適切な助言に支えられて、調査を続けることができた。各位に対し深く謝意を表する。

II 荻窓園芸市場の概要

荻窓園芸市場の前身は東京都西部花卉園芸組合の仲間同志が、自分達の品物を相手のものと交換する「市」から出発した。交換市は戦前からあったが、昭和23年に組織化が計られ、その後、農業協同組合としてさらに組織を強化し、昭和27年に開設したものである。当時は鉢物や球根、苗物の流通は小売店直結または生花市場にたよらなければならなかったので、自分達の生産物の販路拡大のために農協の事業部として、鉢物などを専門に扱う市場を開設したのである。正式な名称は、東京都西部花卉農業協同組合、荻窓園芸市場（東京都杉並区下井草4丁目31番地1号）であり、運営は組合員によっておこなわれている。

役員は理事15名、監事3名で構成されており、理事の互選により組合長と専務理事が1名づつ選出され市場の運営にあたっている。このことは民間の市場、流通センターと組織を異にするが、実際の業務は生産者から入荷した品物をセリによって小売人へ売渡すもので、一般市場と全く同じである。

1. 取 扱 品 目

第1表は、荻窓園芸市場における昭和45年度の取扱品目別の数量をあらわしたもので、品目を大別すると鉢物、苗物、植木類となる。

鉢物の主な種類はシクラメン、シネラリア等の施設鉢花の比率が高いが、鉢コギク、ハボタン等の露地物も多く、一般的な鉢花が約55%を占めている。盆栽物（10.2

第1表 取扱品目の種類別入荷量

1. 鉢物 (昭和45年)

種類	数量	比率
シクラメン	86,463鉢	7.6%
シネラリア	76,845	6.8
ベゴニア	51,232	4.5
ポットマム	50,457	4.4
P.ポリアンタ	47,829	4.2
球根鉢物	33,479	2.9
ゼラ・ペラルゴニューム	24,837	2.2
アザレア	23,271	2.1
サボテン	23,029	2.0
マツバギク	18,681	1.6
グロキニシア	18,642	1.6
P.マラコイデス	17,917	1.6
鉢コギク	74,233	6.5
ハボタン	47,720	4.2
マリーゴールド	12,070	1.1
トウガラシ	10,800	1.0
アザガオ	6,853	1.0
観葉植物	101,043	8.9
盆栽類(ソテツを含む)	115,890	10.2
その他の鉢物	290,923	25.6
計	1,132,214鉢	100.0%

2. 苗物

種類	数量	比率
パンジー	6,896箱	11.7%
デージー	3,543	6.0
ナデシコ類	2,810	4.7
芝桜	1,699	2.8
アルメリア	947	1.5
チューリップ	824	1.3
サルビア	7,615	13.0
野菜苗	5,910	10.0
松葉ボタン	4,421	7.5
アザガオ	1,588	2.6
百日草	749	1.2
その他の苗物	22,069	37.7
計	59,071箱	100.0%

%), 観葉鉢物(8.9%)も多量に入荷しているが、これらは沢山の種類にわかれている。

鉢物の中で、その他の鉢物が高い比率(25.6%)を占

めているが、この中には一年草、宿根草の草花をはじめナス、トマト等の鉢植、山野の草木等、極めて広範な植物が多重多様な形で含まれている。

苗物は、花だん植込み用のパンジー、サルビア、松葉ボタン、デージー等が主体であるが、最近はナス、キウリ、トマト、トウガラシ、パセリ等の野菜苗物の増加がめだってきている。

その他の苗物が38%を占めており、この内訳は鉢物の場合以上に多種多様である。

植木類は、80種類以上の品目が入荷するが、ツツジ、サツキ、ツバキ等の各品種、クチナシ等の花木類、および各種マツ類が主体で、入荷量が極めて少いものの種類数が多い点は鉢物、苗物の場合と同じである。

2. 品目別の取扱金額

取扱品目が多種類であるため、それらを類別して取扱金額をあらわすと第2表のとおりである。類別の方法は第1表とは幾分異なり、鉢物については施設鉢花と若干の一般鉢花のみとし、花だん植込み用を目的としたサルビア、マリーゴールド等の鉢物は、花だん苗物として集計してある。

第2表 入荷品目の種類別取扱金額

(昭和40年度)

類別	取扱金額	比率
鉢物 (施設鉢花；シクラメン、プリムラ、ポットマム等)	千円 34,252 (29,651)	% 48.9 (42%)
観葉植物	9,714	13.9
花だん苗物(マリーゴールド、サルビア等の鉢植え、または鉢抜き)	9,946	14.2
庭園樹木類および盆栽	14,964	21.3
その他(スイレン等の水生植物、野菜苗、園芸資材および種子等)	1,223	1.7
計	千円 70,099	% 100.0

注()内の数字は、シクラメン、ポットマム、シネラリア、プリムラ・ポリアンタおよびメラコイデス、アザレア、グロキニシアの取扱金額と比率をしめす

種類別の取扱金額においては、鉢物が約半分(48.9%)を占め、植木と盆栽類(21.3%)が、これに次ぐ。花だん用苗物と観葉植物は14.2%, 13.9%で、それ以外のもの(水生植物、野菜苗、種子、園芸資材)が取扱金額全体に占める割合はわずかに1.7%である。

鉢物の中ではシクラメン、プリムラ類、ポットマム、シネラリア等の施設鉢花がほとんどで(87%), 市場取扱金額全体の42%(2,965万円)を占めている。

施設鉢花は単価の高いものの種類が多いため、取扱数量における地位が高いこと以上に、市場における取扱金額において重要な地位にある品目といえる。

3. 取扱金額の年度別推移

鉢物、苗物、植木などの、いわゆる根付物の入荷は、ここ10数年、著しく伸びてきている。

第3表は、茨城園芸市場における年度別の取扱金額である。昭和35年の取扱金額6,176,050円を100とした指数の現在までの推移は、昭和36年174、37年345、38年419、39年723、40年1,135、41年1,683、42年2,033、43年2,505で、昭和45年の取扱金額は218,804,010円(3,543)となっており、10年間で約35倍の増加がみられる。

第3表 茨城園芸市場における年度別取扱金額の動き
(昭和35~45年)

年 度	取扱金額	昭和35年を100とした比率
昭和35年	6,176,050円	100
36年	10,734,460	174
37年	21,326,260	345
38年	25,907,220	419
39年	44,651,800	723
40年	70,099,720	1,135
41年	103,924,310	1,683
42年	125,537,360	2,033
43年	154,719,630	2,505
44年	180,872,610	2,929
45年	218,804,010	3,543

開設以来、毎週月・木曜日が開市で、週2回であったが、昭和42年以降は入荷量の多い3~5月および12月は入荷が多すぎてさばききれないことから、週3回(月・木・土)の開市をおこなっている。

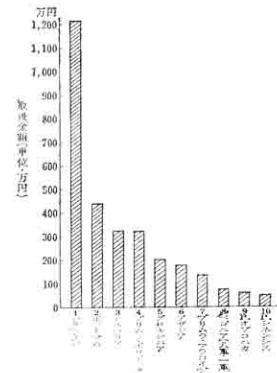
本報告の鉢花市場動向の分析に使用する資料の対象である茨城園芸市場は、根付物の生産と消費の順調な伸びを背景に着実な成長をしている市場とうことができる。

Ⅲ 主な施設鉢花の市場における地位

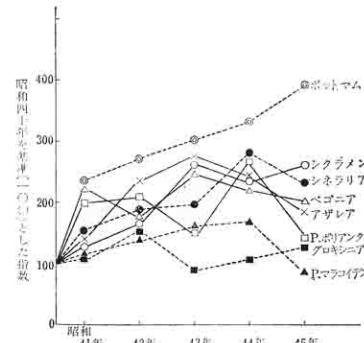
施設鉢花は市場の取扱金額の約半分近くを占める重要な地位にあることは、すでに第2表から明らかなることである。

施設鉢花には多くの種類があるが、主なものは10数種類で、その中ではシクラメンが特に多額に取扱われている。第1図は昭和41年度の主な鉢花について、取扱金額

の多い順に10位までをしめしたもので、シクラメン1,212万円、ポットマム427万円、シネラリア323万円、プリムラ・ポリアンタ319万円、グロキシニア195万円、アザレア175万円、プリムラ・マラコイデス131万円、ベゴニア・センバーフローレンス68万円、プリムラ・オブコニカ60万円、プリムラ・シネンシス50万円となっている。



第1図 主な鉢花の取扱金額の順位 (昭和41年度茨城園芸市場)



第2図 昭和40年を基準(100)とした主な鉢物入荷量の推移 (茨城園芸市場)

第2図は昭和40年度の入荷鉢数を基準(100)として、その後の推移を主な鉢花についてあらわしたものである。

概観すると、

- ① ポットマムは年々入荷鉢数が著しく増加してきている。
- ② シクラメン、シネラリア、アザレア、ベゴニアは年度により若干の変動があるが漸増傾向にある。
- ③ グロキシニア、プリムラ・マラコイデスは顕著な増加はみられず、ほぼ横ばいである。
- ④ プリムラ・ポリアンタは年度による増減が激しい。ということができる。

ポットマムは我国での生産の歴史が浅く、昭和40年か

ら本格的な栽培が始まった鉢花であるから入荷量の伸びが顕著なのであろうが、しかし、昭和40年にはすでに12,946鉢のポットマムが入荷している。この年のアザレアが12,592鉢、グロキシニアが16,405鉢であることからみると、ポットマムのその後の入荷量は順調に伸びてきているといえる。

IV 施設鉢花の市場動向

東京都の鉢花生産農家は、できた製品のすべてを市場出荷するとは限らないが、専業化が進んだ昭和30年代の後半からは、大量の荷を確実に動かすことができる市場出荷が流通の主軸となってきている。したがって、茨城園芸市場の入荷量の動きは、生産情況の動きとしてとらえて大きな誤りはない。しかし、種類によってはそうでないものもあるので、それについても生産者に対する調査を併せて行い、ほぼ事実をとらえることができるよう努めた。

1. シクラメン

シクラメンは、多くの鉢花生産農家の基幹作目にとりあげられているので、施設鉢花の中で最も取扱金額が多い。

(1) 年度別入荷鉢数

第4表はシクラメンの年度別入荷鉢数の推移をしたものである。昭和40年度に入荷した33,801鉢を100とすると、昭和41年120、42年149、43年260となっており、昭和43年度までの入荷量は順次増加してきているが、昭

第4表 シクラメン年度別入荷鉢数（茨城園芸市場）

項目	入荷鉢数	増加率
年度		
昭和40年	33,801鉢	100
41年	40,536	120
42年	50,462	149
43年	87,928	260
44年	77,212	228
45年	86,463	256

和44年度は228(77,212鉢)となり、前年に較べ若干の入荷減となった。昭和45年度は256(86,463鉢)で、44年に較べ増加しているが、43年よりは約1,500鉢少ない入荷量であった。

(2) 月別入荷量

第3図はシクラメンの総入荷量を年度別に100とし、各年の月別入荷比率をあらわしたものである。シクラメ

ンは9月に播種したものが翌年の暮れから、その次年に出荷されるので、本報告におけるこの種の鉢花についての年間入荷鉢数と月別入荷比率は、年度をまたいで加える方法により算出した。例えば、昭和40年度の入荷鉢数とは昭和40年9～12月と昭和41年1～4月を加算したものとなっている。

第3図をみると、月別入荷量の様相は年度を追うごとに変化してきており、およそ3グループにわけができる。

① 1、2月に大部分が入荷する。昭和34～36年の入荷量のピークは2月にあり、1月がそれに次ぎ、3月にも相当量の入荷がある。昭和35年度産についてみると、総入荷鉢数の40%は1月で、2月37%，3月15%で昭和35年12月はわずかに7%にすぎない。11月にも若干の入荷はあるが、大部分は翌36年1、2月に入荷(79%)している。

② 1月が最も多く12月にも相当量入荷する。昭和37～40年度の入荷は1月がピークで、12月の入荷は相当量の増加がみられるが、2月にも多く入荷している。昭和39年度産についてみると、40年1月38%，2月24%で、全体の62%を占めているが、昭和39年12月に23%の入荷があり、①の月別入荷状況に較べ明らかな出荷期の前進がみられる。

③ 12月の入荷が約半数を占める。昭和40年度産以降は12月の入荷量比率が最も高く、次いで1月、11月の順である。昭和43年度産についてみると、総入荷鉢数76,884鉢の55%が12月に入荷しており、翌44年1月19%，43年11月15%の順で、残り11%が9、10月と2、3月に入荷している。

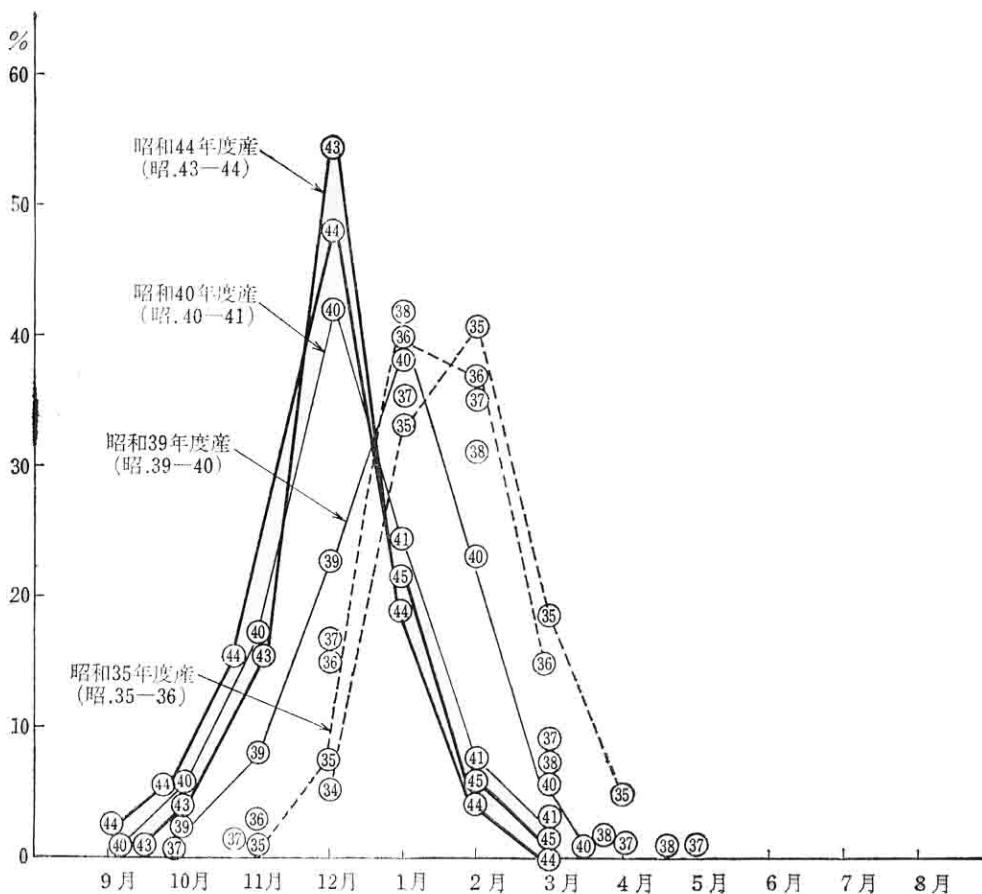
以上を整理すると、第4図からも明らかなようにシクラメンの入荷時期は、昭和38～40年を境に著しい前進がおこり、昭和40年代には生産鉢数のおよそ50%が12月に出荷を完了するようになったといえる。

(3) 平均単価

第5表は年度別の平均単価、および、平均単価を100とした場合の月別単価の変動を指數であらわしたものである。

昭和38年度と40年度は鉢の大きさ(4.5～7号鉢)の区別がされていない総平均である。38年は194円、40年は242円で、2年間に価格が上昇しているのであるが、このことは単価の高い12月の入荷量が増加したためであると思われる。製品のサイズが大型化したためとも考えられるが、むしろ、第3、4図から明らかなように価格の有利な早期出荷が進み、昭和38年度の12月出荷17%が、40

年間入荷鉢数に対する比率



注1) ○印の数字は昭和の年号をしめす

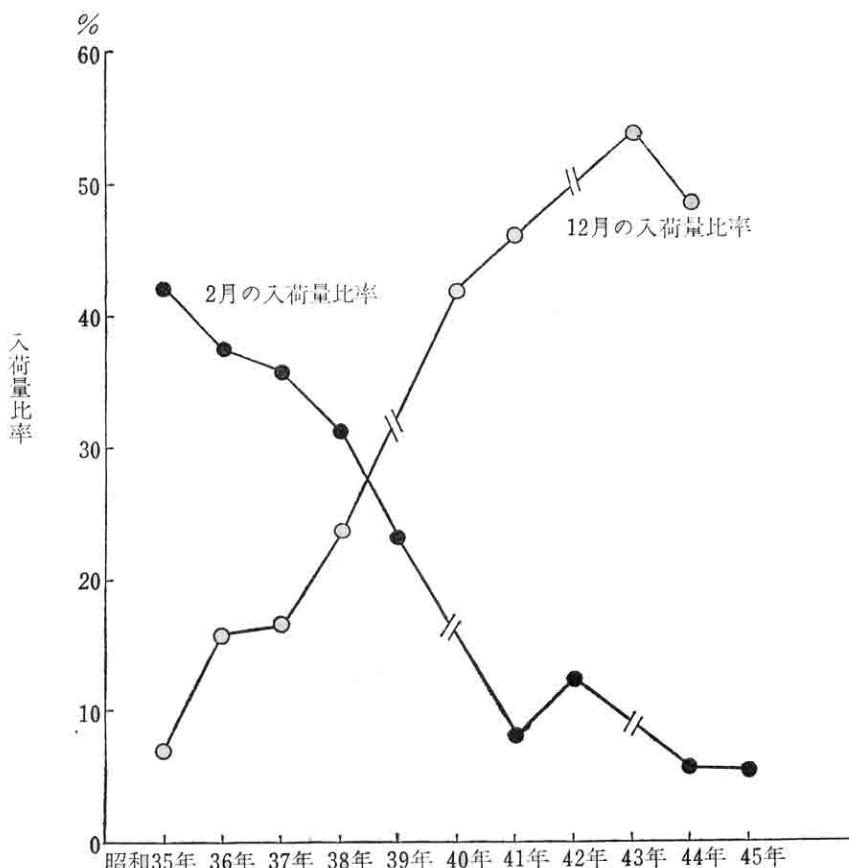
注2) シクラメンは前の年に播種したものが翌年の暮れから、その次の年に入荷するため、年間入荷鉢数は前年9～12月と次年1～5月を加えて算出した。

第3図 シクラメン月別入荷比率の年次推移（荻窪園芸市場）

第5表 シクラメンの平均単価*とその指標の月別変動（荻窪園芸市場）

項目	平均 単 価	1月	2月	3月	4月	9月	10月	11月	11月
年度									
昭和38年	混 合 194円 (100)	80	68	58	24	—	165	145	140
40年	混 合 242円 (100)	78	58	52	24	124	143	116	120
41年	6号鉢 301円 (100)	90	66	43	24	121	120	109	119
44年	6号鉢 304円 (100)	61	40	32	—	—	98	96	103

* 昭和38、40年の平均単価は4.5～7号鉢を総合計した単価で、昭和41、44年は6号鉢についての平均単価である。



第4図 シクラメンの2月と12月の入荷量が総入荷量(100%)に占める比率の年度別推移(荻窪園芸市場)

年には43%になっていることがしめしているごとく、出荷期の前進が単価の上昇となってあらわれたとみることができることができる。

昭和41年度と44年度の平均単価は6号鉢についてであるが、301円、304円で、ほとんど変わっていない。両年の月別入荷比率の様相は大きな差がみられない(第3、4図)ことから、入荷鉢数は2倍強に増加した(第4表)が、価格の下落はなかったといえる。しかし、労賃をはじめとした生産費は上昇していることを考えると、収益性の面では問題を含んでいるといえよう。

平均単価の月別変動は早期出荷ほど高値で、昭和38年について年平均単価194円を100とした場合の月別変動をみると、10月165、11月145、12月140、1月80、2月68、3月24となっている。10月と11月は全体の2%弱の入荷比率であるから、入荷がより増加した場合の安定度には疑問があるが、12月は全体の約17%の入荷があるにもかかわらず平均単価を40%上回る高価格であることは需要の多い月であることをしめしているといえる。

年内出荷が高値で、年を越した1~4月の荷は平均単価を下回ることは、昭和38年にかぎらず各年を通して共

通しているが、その傾向の程度は年度が進むにつれて緩やかとなり、昭和44年では平均単価を上回る月が12月だけで、それ以外の全ての月が平均単価以下である。

第3、4図にみられるように昭和40年代には出荷時期の前進が顕著で、全量の約半数が12月に入荷してきている。昭和38年においては、年内の入荷があまり多くないために、需要の多い12月は明らかな高値がしめされていたが、出荷期が前進したことにより現在の6号鉢の平均単価は、昭和38年にみられるような月ごとの単価の差が明らかでなくなっている。

(4) まとめ

シクラメンは12月に需要のピークがあり、市況が高値で安定しているので、生産技術の工夫と高冷地育苗の採用により、従来の出荷期は大幅に前進した。現在では製品の大半は年内に出荷される生産形態で定着してきている。その結果、暮出しあは従来ほどの高値ではなくなってきているが、12月の価格はそれでもなお安定して高値である。

2 シネラリア

(1) 年度別入荷鉢数

第6表はシネラリアの年度別入荷鉢数の推移をしめたものである。

昭和40年には施設鉢花の中で最も多い36,816鉢の入荷

第6表 シネラリアの年度別入荷鉢数（荻窪園芸市場）

年度	項目	入荷鉢数	増加率
昭和40年		36,816鉢	100
41年		58,351	151
42年		69,412	189
43年		72,997	198
44年		100,090	271
45年		86,745	236

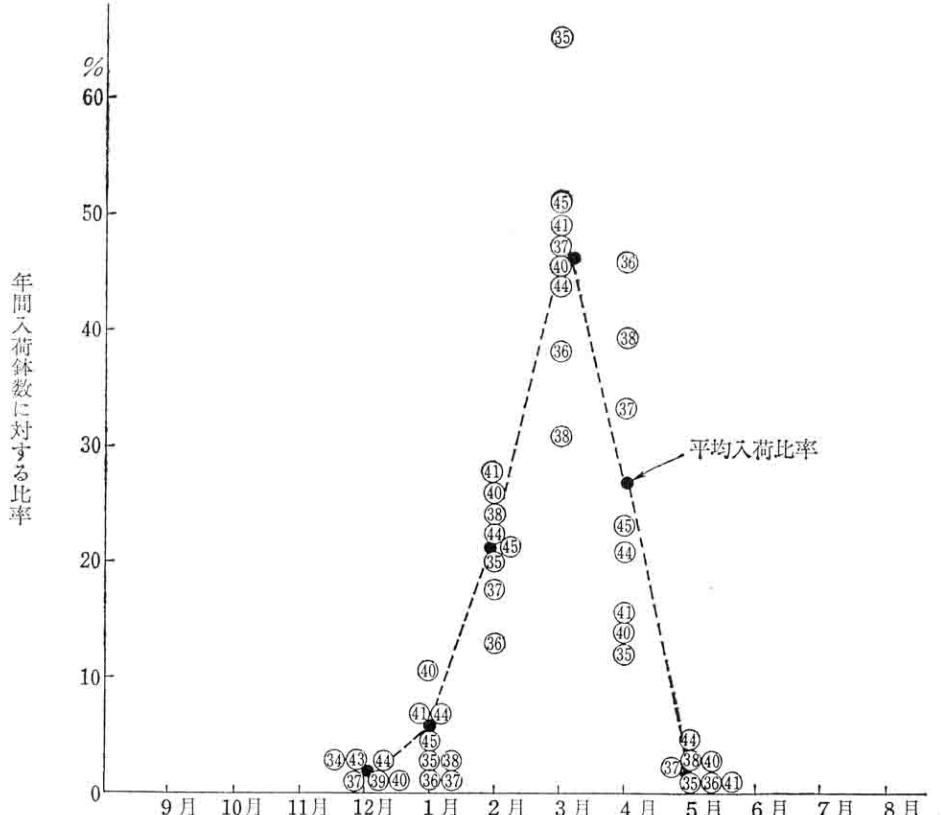
があり、5年後の昭和45年においても首位であるが、2位のシクラメン86,463鉢よりわずかに多い86,745鉢の入荷となっている。その間の入荷鉢数について昭和40年の入荷量を100とした指数の推移をみると、41年151、42年189、43年198、44年271と漸増しているが、昭和45年は236で、前年に較べ若干減少している。

(2) 月別入荷量

第6図はシネラリアの年度別総入荷鉢数を100とし、それを月別入荷比率であらわしたものである。シネラリアは7月に播種したものがその年の12月から翌年に出荷されるために、年間入荷鉢数とその月別比率は年度をまたいで加える方法により算出した。

シネラリアの月別入荷状況の特徴は

① 入荷ピークは3月である。



注1) ○印の数字は昭和の年号をしめす。

注2) ---各々の年の月別平均入荷比率をしめす。

注3) 年間入荷鉢数は、前年12月と当年の5月までを加算したもので、

例えば、昭和35年播種のものは、同年12月と翌年(昭和36年)5月に入荷するため、それらの合計から月別比率を算出した。

第5図 シネラリア月別入荷比率の年次推移（荻窪園芸市場）

② その前後(2, 4月)にも相当の入荷があり(第6図)この3ヶ月で約90%を占める。

③ ①と②の傾向は従来から変化することなく現在にいたっている。

といえる。

シクラメンにおいては、昭和39年頃を境に入荷量の月別比率が大きく変り、昭和40年代には大幅な出荷期の前進がみられたが、シネラリアにはこの傾向はほとんどみられない。昭和30年代の4月の入荷比率が若干減少し、2月が増えている面がみられる(第5図)といえるが、全体的な傾向としては出荷時期の移動はここ10年間に認められない。

(3) 平均単価

第7表は年度別の平均単価、および、平均単価を100とした場合のその年の月別変動を指数であらわしたものである。

平均単価は昭和38年50円、40年60円、41年55円、44年67円である、最近の平均単価はおよそ60円前後とみることができるが、昭和41年は55円と安値をしめしている。

単価の月別変動は各年とも1月が比較的高値をしめし

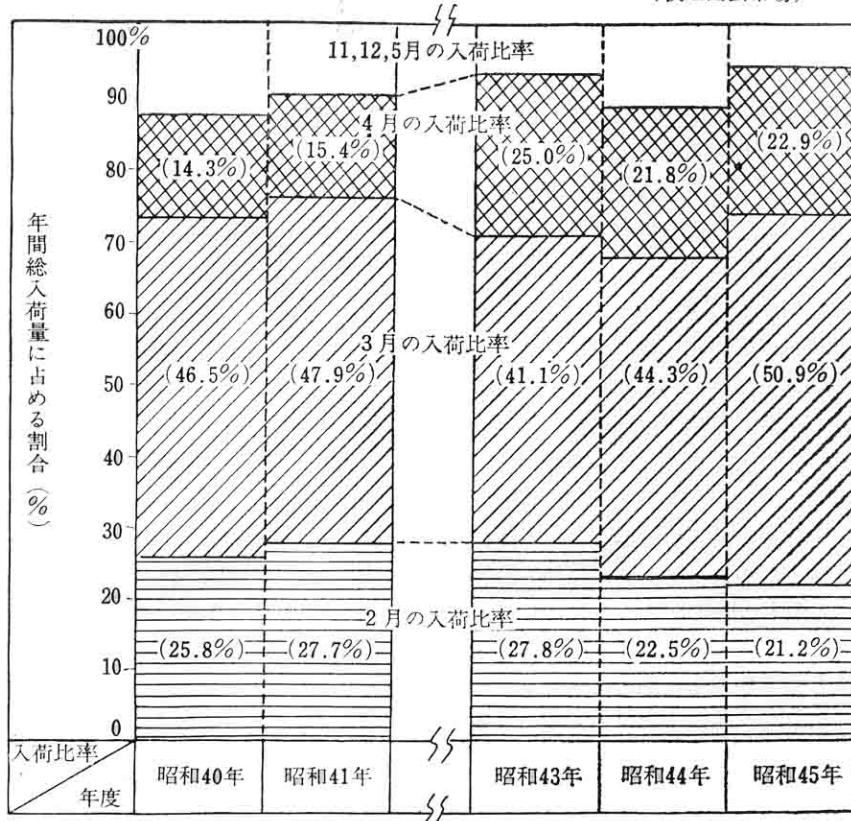
第7表 シネラリアの平均単価とその指數の月別変動
(荻窪園芸市場)

年度	項目	平均単価	1月	2月	3月	4月	5月
昭和38年	50円(100)	164	148	136	80	36	
40年	60円(100)	153	107	83	91	67	
41年	55円(100)	165	115	85	85	69	
44年	67円(100)	143	96	79	96	55	

ているが、この月の年間入荷鉢数の中に占める比率はほとんどの年が5%前後であることから、入荷量が増加した場合にも従来の高価格を維持できるかは疑問である。

1月の高値から始まって2, 3, 4, 5月と進むにつれて安値となっていくのは各月共通の傾向といえるが、昭和44年3月の平均単価比率は4月の96よりも低い79となっている。この年は調査年度中で最も多量に入荷した年で、3月には44,733鉢が入荷している。昭和40年の全入荷量が36,816鉢であるから44年3月には40年の全量よりも多量の鉢が1ヶ月間に取扱われたことになる。しかも、2月に22,760鉢が取扱われていることからみて、2

(荻窪園芸市場)



第6図 シネラリアの年間入荷鉢数における2, 3, 4月の入荷が占める比率(荻窪園芸市場)

月に充分出回ったうえに3月にも多量に入荷したことになり、安値になったものと思われる。

4月についてみると、40年の4月の入荷は22,012鉢で2月とほぼ同じ程度である。平均単価比率は、2、4月ともに96で、平均単価にはほぼ近い価格をしめしている。このことは、4月は比較的安定した需要があることをしめしている。なぜならば、4月の入荷量は2月と同じ程度に比較的大量であり、この様相は毎年同じ傾向であり、そのうえ、2~4月の平均単価比率は年を追うごとに差が少なくなっているからである。

(4) まとめ

シネラリアの入荷は3月を中心とした2~4月で約90%を占め、その傾向は以前からほとんど変化していない。平均単価は昭和40年以降この3ヶ月間の価格差が少なくなってきており、ほぼ平均単価に近い値をしめすようになってきている。

この原因について考えられることは、シネラリアは他の鉢花に較べ耐寒性が劣る点があげられよう。厳寒期に室内においてシネラリアは寒さで傷害を受けることはしばしば経験することで、小売店では、商品を維持しにく

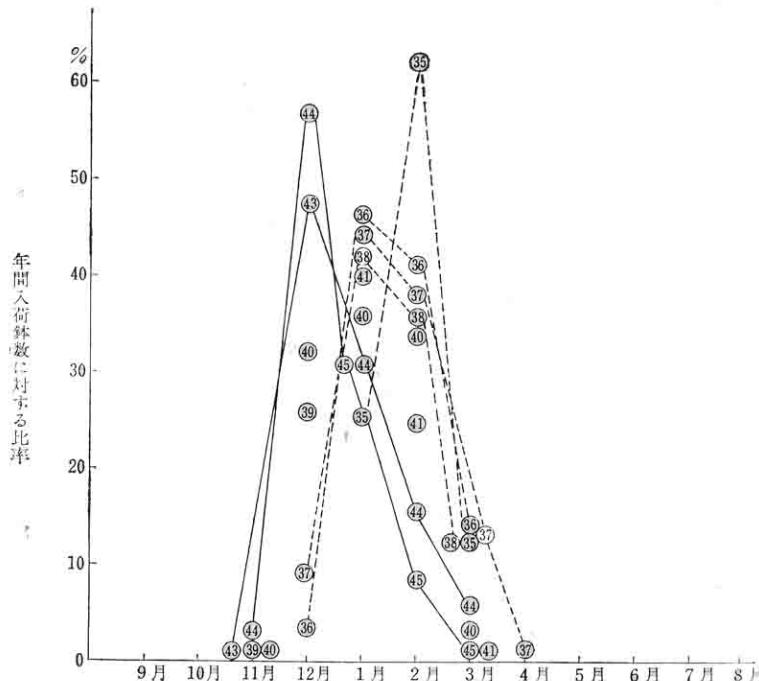
いことから冬期は買控えをする。そのため、気温の低い時期は不活発な荷動きとなる。一般家庭においても同様なことがいえるわけで、そのために3月が需要のピークになるのであろう。すなわち、活発な荷動きとなるのは気温が高まり始めてからで、この時期には相当量が出回っても比較的安定した価格を維持できる需要があるので、年による若干の変動はありながらも、作期に大幅な変化をみることなく現在に至り、これからもこの傾向で生産が継続されていく鉢花といえそうである。

3 ブリムラ・マラコイデス

(1) 年度別入荷鉢数

第8表はブリムラ・マラコイデスの年度別入荷鉢数の推移をあらわしたものである。

昭和40年に入荷した21,014鉢を100とした指数で41年以降についてみると、41年118、42年139、43年161、44年178、45年85となっており、昭和44年までは漸増傾向にあるが、他の鉢花に較べ増加の度合は少ない。昭和45年の入荷は17,917鉢で、40年の85%の入荷にとどまった。この花は古くから親しまれてきた鉢花であるが、昭和40年代にはあまり伸びがみられない状態にある。



注1) ○印の数字は昭和の年号をしめす。

注2) 月別入荷比率の算出はシクラメン等と同様の方法でおこなつた。

第7図 ブリムラ・マラコイデス月別入荷比率の年次推移（荻窪園芸市場）

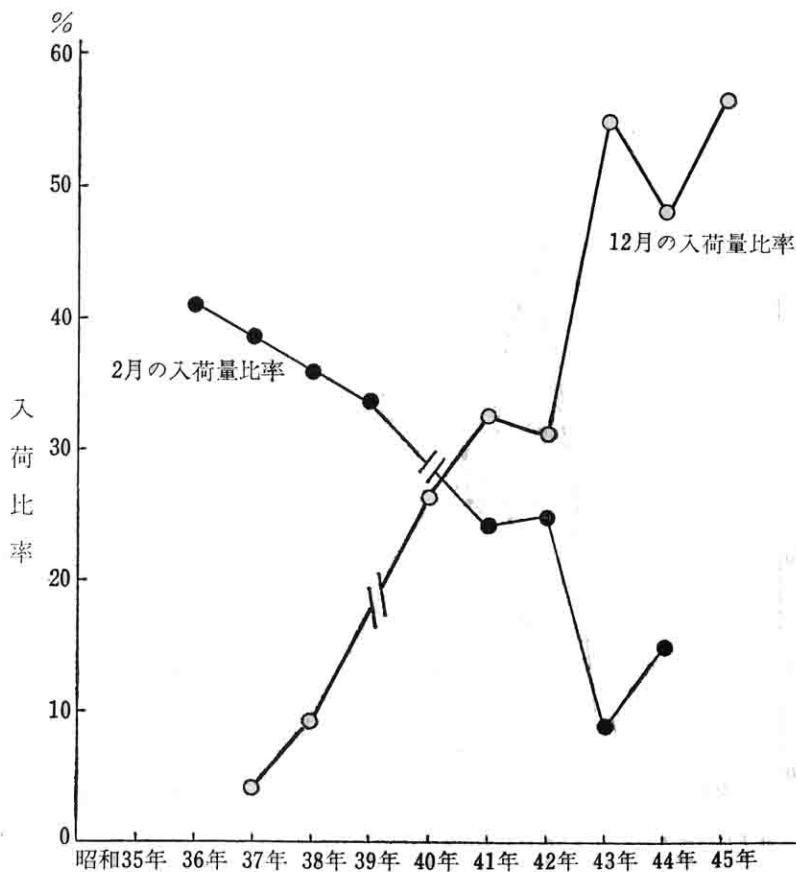
第8表 プリムラ・マラコイデスの年度別入荷鉢数
(荻窪園芸市場)

年度	項目	入荷鉢数	増加率
昭和40年		21,014鉢	100
41年		24,820	118
42年		29,176	139
43年		33,775	161
44年		36,554	174
45年		17,917	85

(2) 月別入荷量

第7図は年度別総入荷鉢数を100とし、その月別入荷状況を比率であらわしたものである。算出方法はシクラメン、シネラリアと同様で、年度をまたいで加えた総入荷鉢数で各月の入荷鉢数を除した。

第7図をみると月別入荷比率は、年を追うごとに早出し傾向が進行している様相が明らかに認められる。入荷ピークをみると、昭和35年は2月であるが、昭和36年から41年までは1月ピークへと前進し、その前進傾向は年を追うごとに段々と12月ピークへと移行してきている。



第8図 プリムラ・マラコイデスの2月と12月の入荷量が総入荷量に占める比率の年度別推移
(荻窪園芸市場)

そして、最近の数年間は12月の入荷量が全体の約半分を占める状態が続いている。

第8図はその様相を端的にしめしており、2月の入荷比率についてみると、昭和36年に41%を占めていたものが年を追うごとに減少し、41年には24%となり、43年には8%に急減している。44年には16%の入荷がみられ、前年より若干増えているとはいえる、10年に満たない間に約1/4の比率に急減している。

12月についての入荷比率の年次推移は2月と全く反対で、年を追うごとに急増し、昭和37年4%であったものが、41年32%，45年57%となって、年間取扱量の半数以上が12月に入荷するようになってきている。

(3) 平均単価

第9表は年度別の平均単価、および、平均単価を100とした場合のその年の月別変動を指數であらわしたものである。

平均単価は昭和38年36円、40年49円、41年53円、44年48円であった。昭和38年は36円と安値であるが、40年代は単価が幾分高まっている。これは、出荷期の前進により価格の有利な12月の入荷量が多くなったことが主な原因である。

第9表 プリムラ・マラコイデスの平均単価とその指標の月別変動（荻窓園芸市場）

年度	項目	平均単価	1月	2月	3月	11月	12月
昭和38年	36円(100)	103	92	78		306	117
40年	49円(100)	106	67	82		267	116
41年	53円(100)	79	77	70		232	151
44年	48円(100)	73	88	73		285	138

因で、最近の平均単価は、およそ50円前後である。

単価の月別変動は各年とも年内が高値をしめし、2月、3月は安い。

1月は平均単価に近いが、最近は平均を下まわってきているのは、出荷期が前進したために、12月に大量に出回ってしまうようになったからであろう。

11月の単価は高値であるが、この月の入荷量は第7図にみられるとおり極めて少なく、わずか1%前後であるから、入荷が増加した場合に高値を維持できるかどうか不明である。しかし、現在よりも出荷期を前進させることにより将来性が期待できるとも考えられる。

(4) まとめ

プリムラ・マラコイデスは早春の花としてのイメージが強く、購入された後の耐寒性はシネラリアより勝ることから、早出しの有利な鉢花として出荷期の前進が著しい。10年前頃までは2月の花であったものが、現在は12月の花として、入荷量の大幅な増大がみられたにもかかわらず、比較的有利な価格を維持している。しかし、今後の大幅な需要増は期待できず、入荷の急増は価格の低落をまねくおそれがある。

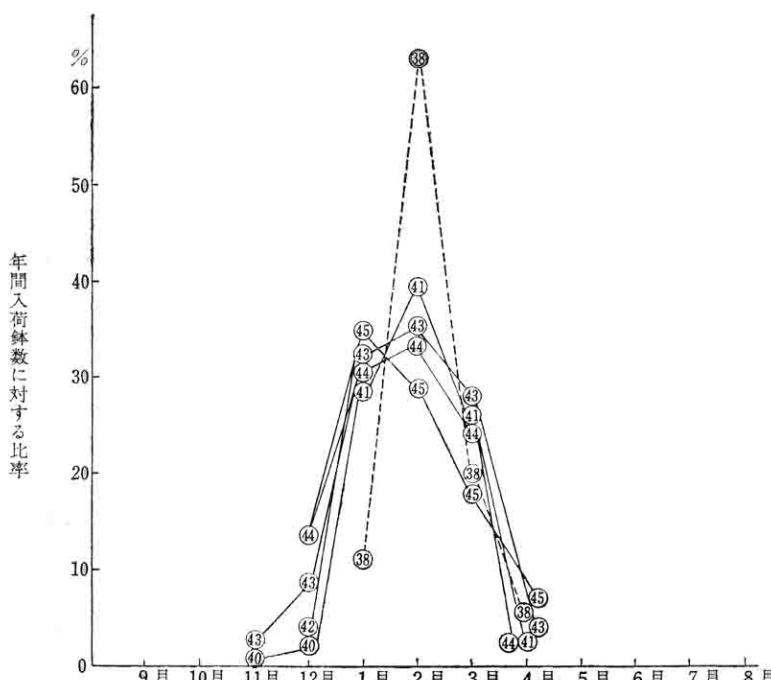
4 プリムラ・ポリアンタ

(1) 年度別入荷鉢数

プリムラ・ポリアンタは、鉢花用品種として商品価値

第10表 プリムラ・ポリアンタの年度別入荷鉢数
(荻窓園芸市場)

年度	項目	入荷鉢数	増加率
昭和40年		34,357鉢	100
41年		67,945	198
42年		73,222	213
43年		50,223	146
44年		91,628	267
45年		47,829	139



注1) ○印の数字は昭和の年号をしめす

注2) 月別入荷比率の算出はシクラメン等と同様の方法でおこなった。

第9図 プリムラ・ポリアンタ月別入荷比率の年次推移 (荻窓園芸市場)

の高いパシフィック・ジャイアントが作出されるまでは、花だん用苗として地堀りによる箱入りの株が取引される程度で、鉢花としての地位は低いものであった。昭和36年頃から新しい品種の入荷がみられだして、それ以後は急速に増加し、昭和37年923鉢、38年3,529鉢であったが、昭和40年には、34,357鉢の入荷をみている(第10表)。

昭和40年の入荷量を100としたその後の推移は41年198、42年213と急増したが、43年は146(50,223鉢)で前年に較べ入荷が減少した。翌、44年は91,628鉢(269)で再び急増したが、45年には47,829鉢(139)となり、最近は隔年ごとに入荷が増減している。このことは、昭和40年初期の急増以後は需要量に近い生産量となっていることをしめしていると考えられる。

(2) 月別入荷鉢数

第9図はポリアンタの年度別総入荷鉢数を100とし、その月別入荷状況を比率であらわしたものである。算出方法はシクラメン等と同じで、年度をまたいで加えた総入荷鉢数で各月の入荷鉢数を除した。

昭和38年の入荷量は2月がピークで全体の63%を占め1月12%，3月19%，4月6%となっている。

昭和40年においても2月がピークであることは38年と同じであるが、その比率は大幅に減少し39%にとどまっている。そして、その前後の月が増加し、1月31%，3月25%となって、最盛期の幅の広がりがみられる。この傾向はその後も続き、年度が進むにつれてピークの山がゆるやかになってきているが、入荷の中心が1～3月である点は変わっていない。

1，2，3月の入荷量の合計が年間総入荷量に占める比率は、昭和40年95%，42年94%，43年88%，44年81%となっており若干の減少がみられるが、それは、11月、12月、4月へと入荷が分散してきているためである。その中では特に12月と4月が増加してきているのであるが、これは、昭和30年代の2月出荷中心型から出荷期の幅を広げて需要の拡大、価格の安定をめざす努力が計られてきているものと推察される。

また、年を追うごとにゆるかではあるが作期の前進傾向がみられ、第9図にみられるとおり昭和45年は特にその傾向が顕著であるが、同時に晩春の入荷比率も増加してきている。4月の入荷比率が昭和40年2.2%，42年3.4%，43年2.6%，44年6.9%となっていることから、出荷ピークがゆるやかになりつつ、除々にではあるが出荷期の幅が広がってきており、作期は少しづつ前進している傾向があるといえる。

第11表 プリムラ・ポリアンタの平均単価とその指標の月別変動(荻窪園芸市場)

項目	平均単価	1月	2月	3月	4月		12月
年度							
昭和38年	69円(100)	110	96	93	91		—
40年	59円(100)	129	85	98	100		117
41年	47円(100)	113	91	96	70		232
44年	44円(100)	105	89	89	152		161

(3) 平均単価

第11表は年度別の平均単価、および、平均単価を100とした場合のその年の月別変動を指標であらわしたものである。

平均単価は昭和38年69円、40年59円、41年47円、44年44円となっており、年を追うごとに下落してきている。パシフィック・ジャイアントが市場へ出初めた昭和40年以前は高値であったが、昭和41年以降は極めて多量の入荷(第10表)をみるようになったため、平均単価は50円を割るまで至ったのである。ポリアンタは育苗以後の管理は粗放で済むため、この程度の価格でも経営が成り立つのであろうが、現在はマラコイデスとほぼ同じ程度の単価で取引されていることになる。

単価の月別変動は、各年とも12月と1月が平均より高い。そのため第9図にみられるように12月、1月の入荷比率が漸増傾向にあるが、シクラメンやメラコイデスのような作期の大幅な前進はみられない。これは、ポリアンタの価格は早出しが有利であるとはいえ、その程度はメラコイデスと異り、入荷の全期間を通して高低の差が少ないからであろう。また、ポリアンタは施設利用の基幹作目として栽培されることはほとんどなく、ローテーション作目のひとつとしての地位にあることを考えると、前作との関係から作期の前進がなされ難い面がある。それらのことが関連しあって、12、1月の早出しは価格面で若干有利な程度では、出荷期を前進させる方向はあまり生じないで、12～4月までの5ヶ月間に、経営内容に応じた生産がおこなわれる状態が続けられているのである。

(4) まとめ

ポリアンタは品種改良の成果により昭和40年前後に急増したが、42年頃にはほぼピークに達し、その後の増加はあまりみられず隔年ごとに増減をくり返している。月別の入荷状況は2月がピークといえるが、12～4月の各月に分散しつつある。作期が若干前進しつつある傾向がみられるが、同時に後期の4月の入荷比率も増加している。単価は早出しが幾分高値であるが、月別の差はあま

り大きくなく、後期になっても極端な下落がみられないのが特徴である。

5 グロキシニア

(1) 年度別入荷鉢数

グロキシニアはシクラメン温室の跡作として、春から夏の期間の施設と労力の有効利用ができるため、昭和30年代の後半から栽培者が盛んになった鉢花である。昭和40年の年間入荷量は16,405鉢で、同年のポットマム12,946鉢よりも多い入荷がみられていたが、その後はほぼ横ばいで伸び悩み状態にある(第2図、第12表)。

第12表 グロキシニアの年度別入荷鉢数
(茨城園芸市場)

年度	項目	入荷鉢数	増加率
昭和40年	入荷鉢数	16,405鉢	100
41年		17,670	108
42年		25,164	153
43年		15,291	93
44年		16,983	104
45年		18,642	114

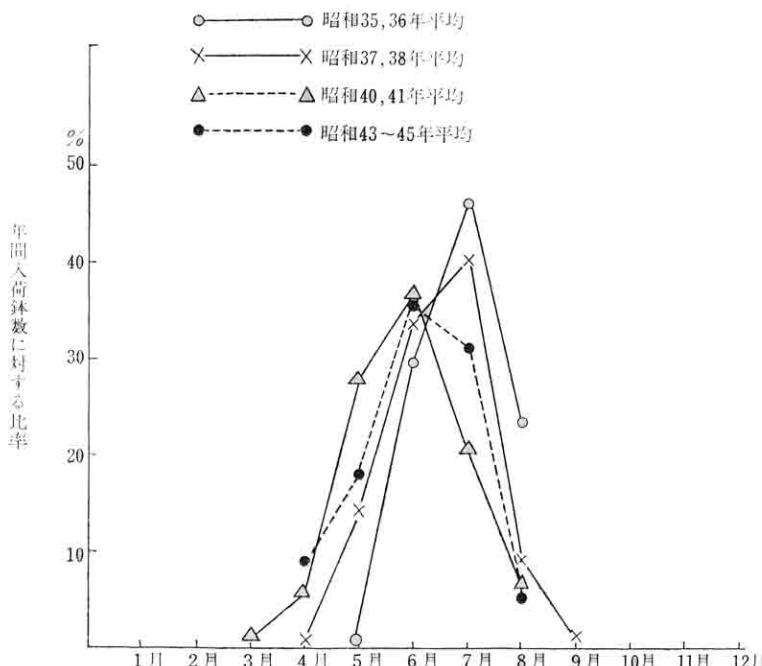
昭和40年の入荷鉢数を100とすると、昭和41年108、42年153、43年93、44年104、45年114であり、年による若干の増減があるが、5年間の入荷量の推移はほとんど増加せずに横ばいである。この原因は、グロキシニアは購入後に落花しやすいため消費が伸びないこと、生産する立場からみると葉が大きくて横に広がるため鉢の占有面積が大きいこと、その葉が折れ易く輸送しにくいくことなどの欠点があるため、花の美しいことにもかかわらず増加する傾向はみられない。

(2) 月別入荷量

第10図はグロキシニアの年度別総入荷鉢数を100としその月別入荷状況を比率であらわしたものである。入荷状況は、各々が同じ傾向にある昭和35・36年、37・38年、40・41年および、43・44・45年をグループごとに合計して、その平均値を図示した。

第10図について、月別入荷比率の特徴を年度にしたがって要約するとつぎのようである。

- ① 昭和35・36年は7月が入荷ピーク(46%)で、6、7、8月の合計で99%を占める。
- ② 昭和37・38年は7月が入荷のピーク(23%)である



第10図 グロキシニア月別入荷比率の年次推移(茨城園芸市場)

が①よりも少なく、5、6月が増加し8月が減少して作期の早まりがみられる。

③ 昭和40・41年は作期の前進が顕著で、3月から入荷が始まり5、6月の荷で過半数を占め、従前にピークであった7月の入荷比率は21%に低下している。

④ 昭和43・44・45年の最近3ヶ年は②と③の中間をしめし、入荷ピークは6、7月に分散し、その前後の月にも相当量の入荷がある。

以上のように、昭和35年頃は7月前後に入荷が集中していたものが、徐々に早まってきて、昭和40・41年頃には大幅な作期前進となつたが、その後は早期の入荷が増加するとともに後期の入荷もふえて入荷が各月へ分散してきている。

(3) 平均単価

第13表は年度別の平均単価、および、平均単価を100とした場合のその年の価格変動を指數であらわしたものである。

第13表 グロキシニアの平均単価とその指數の月別変動
(荻窪園芸市場)

年度	項目	平均単価	3月	4月	5月	6月	7月	8月
昭和35年		65円(100)	—	—	231	158	88	71
38年		108円(100)	—	256	184	115	54	52
40年		111円(100)	—	217	132	94	70	41
41年		110円(100)	144	131	116	100	76	51

平均単価は昭和35年65円、38年108円、40年111円、41年110円となっており、昭和35年が極端に安い65円であるほかは、各年度とも110円前後である。

昭和35年が安値なのは、他の鉢花についても共通していることで、その当時の物価、および、他の鉢花の価格との関連によるのであろうが、グロキシニアにおいてはその傾向が極端である。このことは、35年の場合は価格の安い7月の入荷が約50%を占め、単価の高い5、6月の入荷が少なかったため、この年の平均単価が特別に低くなったものと思われる。

平均単価の月別変動は各年度とも早期ほど高値である。しかし、高植の程度は年度を追うごとに下ってきており、平均単価との差が少なくなっている。5月の平均単価の指數を例にとると、昭和35年231、38年184、40年132、41年116となっており、35年には平均の2倍強の単価であったが、41年には平均単価と同じ程度まで下っている。これは第10図がしめしているように、5月の入荷量が増加してきることによるものである。すな

わち、従来は早出しの価格が極めて高かったため、生産者は作期を早める努力を続けてきた結果、早期の入荷が増加してきたもので、5月の入荷比率をみると昭和35年0.3%，38年18%，40年21%，41年35%と直線的に高まっている。その結果、早出しの単価と最盛時のそれとの間に、従来ほどの大きな価格差がみられなくなっている。

(4) まとめ

昭和40年頃にはすでに主な鉢花としての地位にあったグロキシニアは、その後の入荷量に伸びがみられず現在にいたっている。しかし、作期には大幅な変化がみられ昭和35年頃は7月前後に入荷が集中していたものが徐々に早まってきて、昭和40、41年頃には大幅な作期の前進となつた。しかし、その後は早期(4月)の入荷が増加しつつ7月の入荷比率も高まるなど、入荷が各月へ分散してきている。従来は早出しの単価は極めて高かったが、入荷が各月へ分散しつつ早出しが増加した昭和40、41年においては、早期の単価は平均より高値を維持しているとはいえ、以前ほどは月による大きな差はみられなくなっている。

6 アザレア

(1) 年度別入荷鉢数

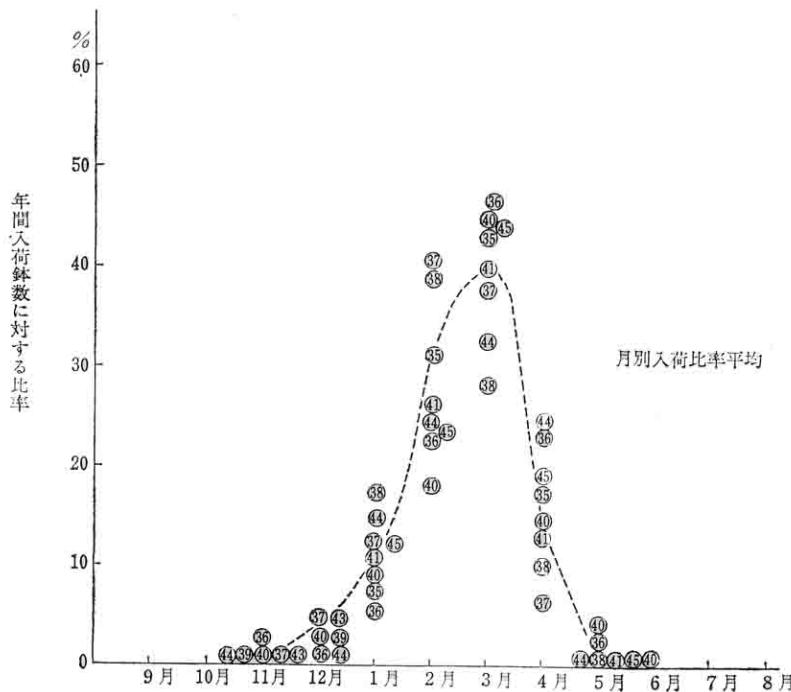
第14表はアザレアの年度別入荷鉢数の推移をしめたものである。昭和40年に入荷した12,592鉢を100とした指數でみると、41年140、42年225、43年261、44年232、45年185となっており、昭和43年までは漸増傾向にあるが、この年をピークに44年は若干減少し、45年はさらに減退している。

(2) 月別入荷量

第11図はアザレアについて各年度の総入荷鉢数を100とし、その月別入荷状況を比率であらわしたものである。点線は、記入年度の全体の平均値であるが、これを見ると、3月と2月の入荷量が極めて多く、4月と1月がこれに次いで多い。その比率は、およそ、3月40%，

第14表 アザレアの年度別入荷鉢数(荻窪園芸市場)

年度	項目	入荷鉢数	増加率
昭和40年		12,592鉢	100
41年		17,670	140
42年		28,380	225
43年		32,909	261
44年		29,245	232
45年		23,271	185



注1) ○印の数字は昭和の年号をしめす

注2) 月別入荷比率の算出は、シクラメン等と同様の方法でおこなった。

第11図 アザレア月別入荷比率の年次推移（茨城園芸市場）

第15表 アザレアの平均単価とその指數の月別変動（茨城園芸市場）

年度	項目	平均単価	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
昭和38年	平均単価	86円(100)	117	97	98	88	—	—	—	109
40年	平均単価	96円(100)	130	119	85	89	80	—	111	134
41年	平均単価	89円(100)	128	104	90	85	56	—	120	124
44年	平均単価	82円(100)	135	95	95	94	—	146	90	—

2月30%, 4月15%, 1月10%, 12月3%, 5月と11月が2%程度であるが、年度により若干異なる。しかし、シクラメンなどにみられたような、年を追うごとに作期が前進するというような一定の傾向はみられない。

(3) 平均単価

第15表は年度別平均単価、および、平均単価を100とした場合のその年の月別変動を指數であらわしたものである。

平均単価は昭和38年86円、40年96円、41年89円、44年82円となっており、比較的入荷の多かった44年(第14表)は安値をしめしている。最も入荷の多かった43年の価格

についての資料が無いため詳細な検討は困難であるが、アザレアの単価は年による変化はあまり大きくな現在にいたっているようである。また、入荷期間は6ヶ月の長期にわたるが、その間の平均単価の月別変動はあまり激しくない。このことは、現状よりも各月に入荷比率を分散させることにより、ある程度の入荷増が起っても価格を維持できる可能性をもつていると考えられる。またアザレアは技術的に周年栽培が可能になっている現在において、出荷期の幅を広げることにより需要の拡大がかかるような内容を持っているともいえる。栽培技術、生産コストの両面から、この面で、今後、検討する価値が

あるのではないだろうか。

(4) まとめ

アザレアは、入荷量、月別入荷比率、平均単価、月別単価のいずれもあまり変化することなく、現在に至っている。毎年同じような状態をくり返しているのであるが入荷ピークを各月へ分散させたり、出荷期の幅を広げるなどして、需要の拡大をはかる余地が認められるので、その面での今後の検討が必要と思われる。

7 ポットマム

(1) 年度別入荷鉢数

本格的な生産が始まったのは昭和40年で、栽培の歴史は浅いが、第2図にみられるとおり、急速な生産の増加傾向にある。昭和40年に入荷した12,946鉢を100としたそれ以後の指数は、41年233、42年267、43年309、44年339、45年390となっており、直線的に増加している。この急増傾向は茨城園芸市場のみの特異な現象ではなく、農林省園芸蚕糸局の調査結果である全国のポットマム生産金額の年次推移（第12図）と、ほぼ一致することから、全

国的な傾向ということができる。

(2) 月別入荷量

ポットマムの生産様式は、大別して4種類あり、それぞれが時期により入荷してくる。最も生産量の多いのは周年栽培で、年間を通して出荷を行う専業経営型である。他の三つは複合経営型で、春秋期型（春、秋が中心で冬は出荷しない）、秋期中心型（10月前後に出荷）、季咲型（自然開花期のみ出荷）である。

ポットマムは生産の歴史が浅く、周年専業型の大規模経営が短年月のうちに成立し、それらの生産者は市場を経ないで小売店との直接取引による流通のウェイトが高い場合が多い。したがって、茨城園芸市場の月別入荷状況を、そのまま生産の実体としてとらえることはできないのであるが、当市場の入荷状況をしめすと、第16表のとおりである。

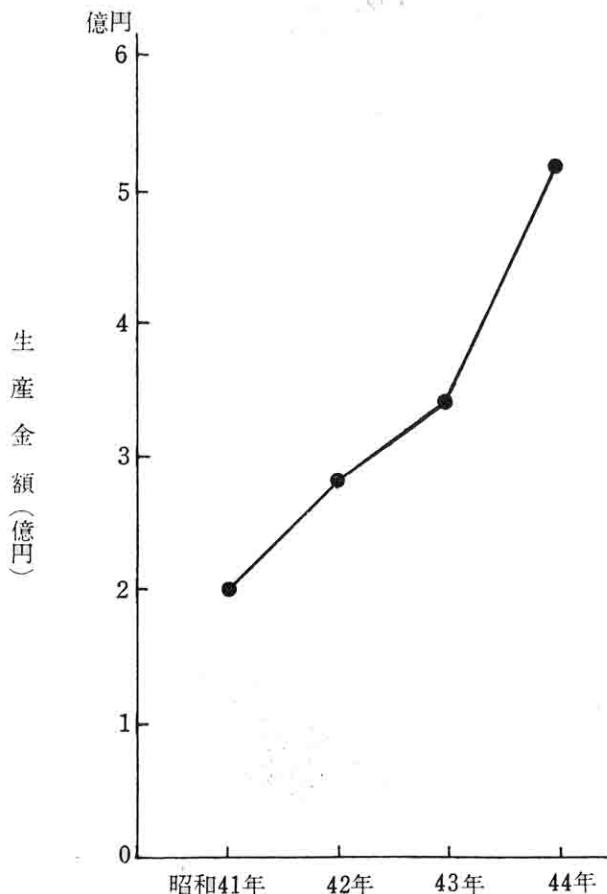
月別入荷比率は年度により若干異なるが、10月が最も多く年間の30%前後を占め、その前後の9月と11月がそれに次いで多く、9～11月の3ヶ月で年間の60%を越える入荷比率となっている。すなわち、ポットマムの入荷時期は秋が中心ということになるのであるが、前述したごとく、この市場への周年生産専業経営からの入荷は一部の生産者の一部分の荷であり、他は直接取引が一般化していることから、この傾向そのままを生産動向としてとらえることはできない。

第13図は、東京を出荷の対象としている各産地の報告をもとに算出した昭和44年に東京へ出回ったポットマムを月別、生産様式別に推計したものである。その結果周年生産123万鉢（59%）、春秋期型22万鉢（10%）、秋期中心型60万鉢（29%）、季咲栽培型4万鉢（2%）という結果を得た。概略的な集計結果であるが、要約すると、一年を通して周年栽培によるポットマムが常に供給され、秋には他の生産様式のものがそれに加わって大きなピークを作る。5月前後にも若干のピークがみられるが秋に較べると極めて低い、ということになる。

(3) 平均単価

第17表は年度別の平均単価、および、平均単価を100とした場合のその年の月別変動を指數であらわしたものである。

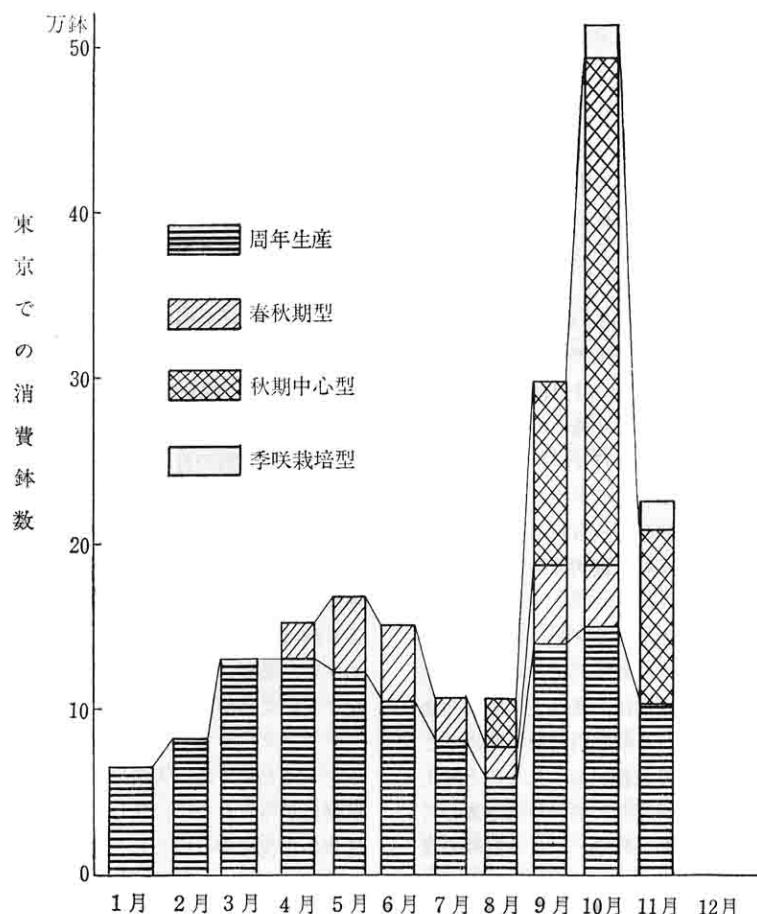
平均単価は昭和40年161円、41年141円、42年154円、43年128円、44年126円で、年を追うごとに下落してきている。ポットマムが市場に出始めたのは昭和40年で、それ以後の平均単価は徐々に下ってきていくわけであるが、このことは第16表にみられるように入荷量の急増が主な原因であろう。



第12図 ポットマム生産金額（全国）の年次推移（農林省蚕糸園芸局調べ）

第16表 ポットマムの年度別入荷鉢数とその指標の月別入荷割合（赤穂園芸市場）

項目	入荷鉢数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
年度													
昭和40年	12,946鉢(100)	—%	1%	1%	5%	8%	1%	1%	6%	24%	32%	16%	5%
41年	31,401 (100)	1	1	4	4	2	9	4	5	15	28	24	3
42年	35,980 (100)	2	1	7	4	5	11	5	4	13	24	19	5
43年	41,854 (100)	1	2	1	1	4	5	8	7	12	35	20	4
44年	55,616 (100)	1	0	1	1	4	7	8	5	12	30	25	6
45年	50,457 (100)	1	1	1	1	2	10	8	7	11	30	24	4



第13図 東京に出回るポットマムの生産様式別の月別鉢数

平均単価の月別変動をみると2～6月、9～11月が平均よりも高値で、その中でも3、4月が高いが、全体的には時期による価格の差が少ない鉢花といえる。ポットマム市場単価の現状は、およそ130円程度で、季節により若干の変動があり、春と秋は高く、夏と冬は安値である。

る。

(4) まとめ

ポットマムは栽培の歴史が浅く、昭和40年から生産が始まった鉢花であるが、その後の生産量の増加が急速に起った。そのため平均単価は年々下降してきているが、

第17表 ポットマムの平均単価とその指標の月別変動（荻窪園芸市場）

年度	項目	平均単価	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
昭和40年	161円 (100)	—	149	134	129	104	76	95	73	85	107	105	76	
41年	141 (100)	121	96	112	114	102	75	113	102	81	102	101	76	
42年	154 (100)	89	104	114	120	112	89	87	75	92	102	108	69	
43年	128 (100)	93	74	124	124	98	102	102	68	102	92	119	86	
44年	126 (100)	74	104	107	122	101	103	79	77	106	106	92	81	

昭和45年までの生産量の伸びは直線的に上昇している。

月別入荷比率は秋と春に多いが、その時期の単価は平均より高い。特に秋の入荷量が極めて多いが、その時期の単価が平均よりも高値となっている。

8 考察および総括

施設を利用して栽培する鉢花の中で市場の取扱金額の多い7種類についての市場動向をみると、各々異った面を持っているが、多くの点で共通していることが多い。

(1) 種類別の入荷状況

各々の鉢花について入荷量の最も多い月をみると、12月はシクラメン、プリムラ・マラコイデス、1月はプリムラ・ポリアンタ、2月はアザレア、3月はシネラリアとなっており、冬から早春にかけては種々の鉢花がつぎつぎに入荷してくる。3月以後は7月ピークのグロキシアまで空白期間がある。最近はハイドランジア、ペラルゴニウムの入荷量に著しい伸びがみられるが、その背景には、この空白時期の鉢花として適切であることによるものであろう。

グロキシア以後は、12月のシクラメン、プリムラ・マラコイデスまでの間、ポットマム以外にみるべき鉢花がない。ポットマムの急激な増加は、栽培上の優れた面や観賞価値の高いことと共に、この空白時期を埋めることのできる適切な鉢花としての意義があったものと考えられる。これらのことから、鉢花の需要は年間を通して存在するもので、しかも、季節(時期)による好みの変化があるということができる。

その立場からみると、従来から観葉植物で占められている夏の時期にも、花持ちの良い鉢花があらわれれば将来性はあるものと考えることができる。夏の時期におけるポットマム等の一般鉢花は、目持つの点で需要が伸び悩んでいる反面、最近はヒビスカス、クチナシ、サルスベリなどの花木鉢花が伸びてきているのは、このあらわれとみることができる。

(2) 入荷量と価格

価格の決定は需要と供給のバランスによることは常識

で、一般に、入荷量が増加すると価格は下落する。しかし、鉢花においてはその常識が必ずしもあてはまらない。

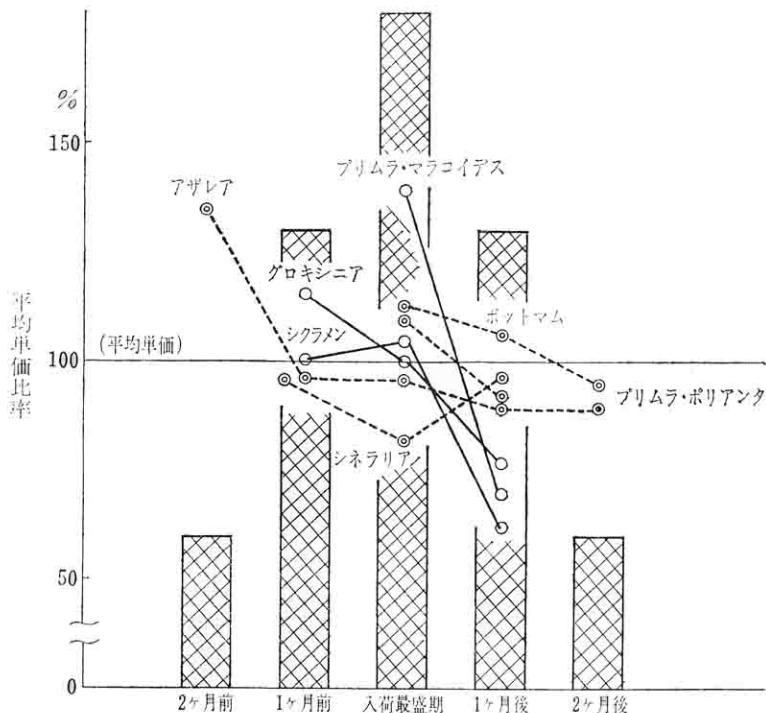
第14図は入荷量の最も多い月を中心にその前後の月について、平均単価を100とした場合の指標の変動状況をあらわしたものである。

概略的にみると、入荷量の最も多い月にも平均単価程度であるということができる。種類によっては平均を上まわる価格をしめしているが、この月には年間総入荷量の30%から多いものでは50%強が1ヶ月間に入荷していることを考えると、鉢花の需要はその種類と時期(季節)が強く結びついていて、種類別に需要期が明確にわかっているといえる。

最盛期より前の月の価格が高値であることは各鉢花に共通で、早出しの有利性がすべての種類について認められるが、最盛期をすぎた後は価格が下落することも、各鉢花に共通している。すなわち、各鉢花ともそれぞれが季節的に明確な「需要の時期を」もっており、その時期より前はいわゆる「はしりもの」として有利な価格をしめすが、需要の最盛期を過ぎると、それ以後は値崩れを起すといえるが、鉢花の種類によっては様相が若干異なる。

アザレア、シネラリア、プリムラ・ポリアンタ、ポットマムにおいては、入荷の最盛期以後においても極端な値崩れがみられない。そして、これらの鉢花の月別入荷比率の年次推移はほとんど変化することなく現在にいたっていることは、前述したとおりである。それに反してシクラメン、プリムラ・マラコイデス、グロキシアの月別入荷比率は、従来に較べ作期の前進がみられた鉢花であるがこれらのものは入荷最盛期をすぎると価格は急落する傾向をしめしている。

以上のことから、作期の動向は価格の動きと密接な関係にあり、需要の時期の幅が広いものは作期が変化することなく現在にいたっているが、需要の時期が限られた短かい期間の鉢花は作期がそこへ集中してきているといえる。そして、需要の時期が短期間の鉢花の従来の入荷



注1)その月の入荷量が10%以上の比率を占めている場合の平均単価だけをしめした。

注2)グロキシニアについては昭和41年の平均単価で、他は44年ものである。

第14図 入荷最盛期前後の月平均単価（荻窪園芸市場昭和44年）

時期は需要期より遅かったために、作期の前進がみられたのである。

一方、需要の時期の幅の広い鉢花においては、従来からの入荷最盛期が需要期と一致していたために、作期がほとんど変化することなく現在にいたったのである。ブリムラ・ポリアンタなどにおいては入荷最盛期の比率が低下し、その前後の月の入荷比率の増加がみられる傾向にあったが、このことは、ポリアンタは需要の時期の幅が広いという背景のもとに、大量入荷による値崩れの危険を防ぐために出荷期を分散させて需要量を拡大するという生産者の対応として理解できる。

(3) 平均単価の推移

各々の鉢花について平均単価の年度別の推移をみたのが第15図である。

シクラメン、グロキシニアは年による変化はあまりみられないが、アザレア、シネラリア、ブリムラ・マラコイデスは年による変化が激しい。ポットマム、ブリムラ・ポリアンタは年を追うごとに価格の低下が著しい。価格が下落傾向にあるポットマムとポリアンタについて考察すると、両者とも鉢花としての歴史が浅いことが共通し

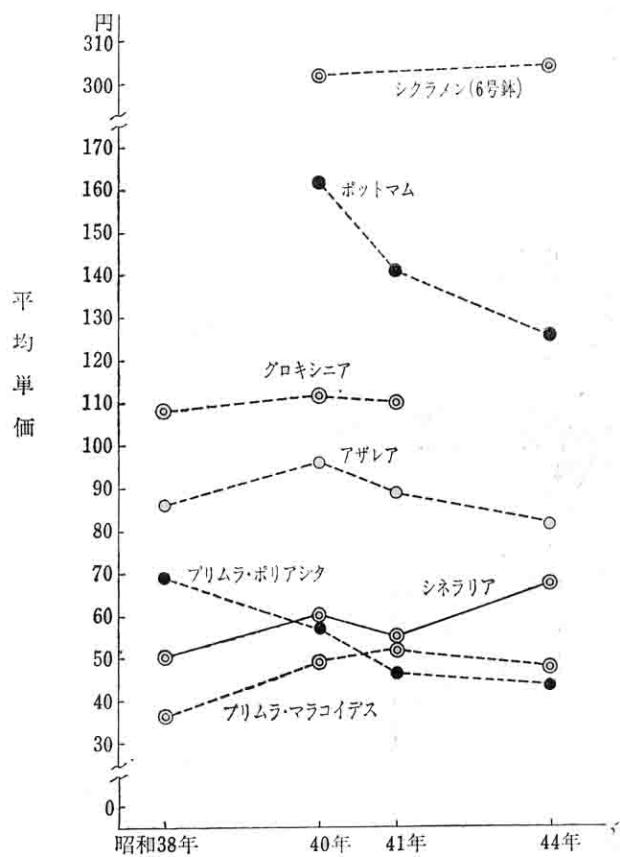
ている。

ポリアンタにおいては品種改良の進歩により、昭和30年代の後半から新しい鉢花として高価格で登場したわけであるが、その後の急増により、昭和40年代に入ると需要をみたすだけの入荷がみられるようになり、従来からあるマラコイデスと同じ程度の価格となって、その後は若干下落しつつ横ばい状態の価格で現在に至っている。

ポットマムは昭和40年から登場した鉢花であり、その後は急増しているので、それと反比例的に平均単価が下落してきている。

鉢花の価格は、新しく登場した場合にその鉢花の商品価値が消費者から確認されると、高価格で取引される。そして、その鉢花が生産する立場から適当な生育特性を備えていると、急激に増産されるようになり、数年後には一般鉢花として定着し、その時点では特別な高価格は維持されなくなる。すなわち、生産者における栽培が一般化すると、その後は、年度による若干の変動をみながらほぼ横ばい状態で落ちくことになる。

したがって、荻窪園芸市場における各鉢花の入荷量は



第15図 平均単価の年度別推移

需要にほぼみあつた量の入荷が現在まで継続されてきているとみることができる。そして、昭和35年から45年までの期間に取扱金額は約35倍強に増加している(第3表)こととあわせ考えると、鉢花の需要はこの期間に著しい増加がみられたということができる。

しかし、生産資材、施設、設備、労賃がいずれも上昇している現状において、各鉢花の平均単価の年次推移がほぼ横ばいであるという事実は、生産者の収益性の面で考えなければならない問題を含んでいることになる。

V 摘 要

東京における鉢物市場として代表的な荻窪園芸市場について、市場の概要、取扱品目の種類と金額を調査した。また、主要品目である7種類の鉢花について、年間総入荷量および月別入荷量と平均単価の年次推移を調査分析した。

その結果の要約は、つぎのとおりである。

1. 荻窪園芸市場の年度別取扱金額は昭和35年618万円40年7,010万円、45年21,880万円となっており、10年のあいだに35倍の増加がみられた。
2. 取扱われる品目は200種類を越えるほど多いが、大

別すると鉢物、苗物、植木類となり、昭和45年度は鉢物113万鉢、苗物6万箱、植木類5万本であった。

3. 種類別の取扱金額を昭和40年度について比率であらわすと、鉢物49%、観葉植物14%、苗物14%、植木および盆栽21%，その他2%であり、鉢物のウェイトが高く、その中では施設を用いて栽培する鉢花が主体となっている。

4. 主な施設鉢花の年間出回り状況をみると12月はシクラメンとプリムラ・マラコイデス、1月はプリムラ・ポリアンタ、2月はアザレア、3月はシネラリア、7月はグロキシニア、10月はポットマムが入荷ピークをしめしており、種類により入荷の最盛期に相異がみられる。

5. それぞれの鉢花は、入荷の盛んな月に年間総入荷量の30~60%強が取扱われるが、極端な値崩れの現象は認められず、その年の平均単価程度で取引されている。このことは、鉢花の需要は、時期によって種類が変りながら、年間を通して存在することをしめしている。

6. 需要の時期と入荷ピークが従来から一致していた鉢花は、作期がほとんど変化しないで現在にいたっているが、従来は需要の時期より遅れて入荷ピークをしめていたシクラメン等については、作期の大幅な前進がみられた。

7. 昭和40年代における各年の平均単価は、年による大きな変化はみられず、ほぼ横ばい状態であるが、新しい鉢花であるところのポットマム、プリムラ・ポリアンタは年を追うごとに平均単価が下ってきている。

8. 新しく登場した鉢花は、その価値が消費者から確認されると高価格で取引される。そして、その鉢花が生産するうえで適当な生育特性を備えていると、急激に増産されるようになる。そのため、数年後には一般鉢花として定着し特別な高値をしめさなくなり、その後は、年度による若干の変動をみながらほぼ横ばい状態で落着くことになる。

文 献

(1) 東京市場の鉢物・苗物価格

東京農試研究資料第20号(昭和39年)

(2) 東京市場の生花・鉢物価格

東京農試研究資料第22号(昭和40年)

(3) 東京市場の生花・鉢物(昭和40年度)価格

東京農試研究資料第28号(昭和42年)

- | | |
|--|---|
| (4) 東京市場の生花・鉢物（昭和41年度）価格
東京農試研究資料第30号（昭和44年） | 東京都農業試験場（昭和45年） |
| (5) 東京市場の生花・鉢物（昭和44年1～5、12月）価格
東京都経済局農林部（昭和46年） | (7) 花きおよび花き球根の生産状況等調査
農林省蚕糸園芸局（昭和45年） |
| (6) 企業的ポットマム周年生産体系の確立に関する研究 | (8) 萩窪園芸市場主要鉢物・箱物月別入荷数量表
東京都西部花卉農業協同組合 |

Summary

The Ogikubo Horticultural Market is one of the leading horticultural markets in Tokyo. The nature of volume and value of products handled at this market was surveyed. The annual total arrival of flowers and plants, and an analysis of the average turnover and prices throughout the year were closely studied. Especially, the annual total and monthly arrival and fluctuations of prices in a year were analyzed.

The gist of the surveys is as follows :

1. The volume of garden plants handled at the Ogikubo Horticultural Market totaled ¥6,180,000 in 1960 ; ¥70,100,000 in 1965, ¥218,800,000 in 1970. These figures showed an increase of 35 times during the past 10 years.
2. The variety of plants handled at this market exceeded 200. They can be divided into three categories----i. e. potted plants, saplings, and large plants. The volume handled in 1970 totaled 1,130,000 potted plants, 60,000 cases of saplings, and 50,000 plants.
3. In value, 49% of the total was potted plants; 14%, foliage plants; 14%, saplings; 21%, dwarf plants (bonsai), and 2%, others. All in all, the number and volume of potted plants is very large and they are cultivated principally at special nurseries.
4. The peak delivery of potted flowers from main nurseries during the year follows :
 - December : Cyclamen, Fairy primroses.
 - January : Polyantha primroses.
 - February : Azalea.
 - March : Florists cineraria.
 - July : Common gloxinia.
 - October : Pot mum.
5. The delivery of potted flowers in peak months is 30—60% of the annual total. Prices are always maintained at the level of the annual average. This indicates that the demand for potted flowers is large throughout the year.
6. The peak of demand and delivery for potted flowers usually coincides, but the delivery of cyclamen has usually been late, but recently it has been noticeably adjusted.
7. In the past seven years, the average unit price of garden plants has not fluctuated very much, but shown a tendency to remain quite stable. The average unit price of pot mum and primrose polyantha has generally become lower year after year.
8. With potted flowers, as the demand increases, the prices usually increase; however, as the production is increased, prices drop and are stabilized.